

「ダイバーシティ&インクルージョン」に関する意識調査

【結果サマリー】

-
- ① 86.8%が多様性に富んだ社会の重要性を感じており、72.8%がダイバーシティ & インクルージョンの推進に前向き
 - ② 95.9%が社会的マイノリティに対して日本社会に差別や偏見があると感じており、73.4%が実際に自分の中にある「心の壁」を何らかの形で意識した経験がある
 - ③ 社会的マイノリティに対する差別や偏見は10代が61.6%で最も低く、最も高い60代の72.9%と11.3ptの差。特にLGBTQに対する差別や偏見は、10代は26.7%であるのに対して60代は54.6%と27.9ptもの大差がある。
 - ④ 社会的マイノリティに対する「心の壁」の感じ方は、「会話など通常のコミュニケーションが取りづらいたろうと思った」が54.8%で最も多く、次いで「日常的な行動や仕事などできないことが多いだろうと思った」49.8%、「自分とは価値観が大きく違うだろうと思った」40.5%
 - ⑤ 社会的マイノリティとより多く、そして深く関わった経験のある人のほうが、そうした経験の少ない人に比べて「心の壁」を感じづらい
 - ⑥ 社会的マイノリティに対する「心の壁」の原因、第1位は「接し方が分からないから」43.1%、第2位は「あまり接したことがないから」42.4%、第3位は「よく知らないから」41.8%
 - ⑦ 「心の壁」を減らす方法の第1位は「一緒にお仕事や日常生活を共にする」が49.5%、第2位は「イベントに参加するなど、コミュニケーションをとる」が42.9%、第3位は「当事者やその家族、周辺の方々の体験談やレポートなどを読む」が23.2%
-

【調査概要】

- ・調査主体：日本財団
 - ・調査対象：日本在住の10代（16歳～19歳）～60代
 - ・調査人数：5,216人
 - ・調査方法：インターネット調査
- ※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない。
- ・調査時期：2019年7月26日～29日
 - ・本調査における社会的マイノリティ：
LGBTQ（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、クエスチョニング/クィア）の人、身体障害のある人、精神障害、発達障害、知的障害のある人、日本で暮らしている外国籍の人、ミックスの人など見た目が日本人に見えない人、高齢者（おおむね75歳以上の方）
 - ・本調査における「心の壁」：
社会的マイノリティに対して、関わりを避けたり、先入観や見た目で行動や価値観に違いがあるだろうと決めつけをしてしまう意識のはたらきのこと

【結果】

① 86.8%が多様性に富んだ社会の重要性を感じており、72.8%がダイバーシティ&インクルージョンの推進に前向き

「ダイバーシティ&インクルージョン」の認知については、「ダイバーシティ」もしくは「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉を聞いたことのある人は66.6%でしたが、意味を知っている人は30.0%に留まりました（図1）。

一方で「ダイバーシティ&インクルージョン」の意味を説明したうえで考えを問うと、86.8%が「多様性に富んだ社会を作ること重要だと思う」と回答し、72.8%が「社会をあげてダイバーシティ&インクルージョンを推進するべきだと感じる」と回答しました（図2）。

「ダイバーシティ&インクルージョン」の認知獲得に向けて課題はありますが、生活者の中でその重要性は十分に理解されていることが明らかになりました。

図1：「ダイバーシティ/ダイバーシティ&インクルージョン」の認知

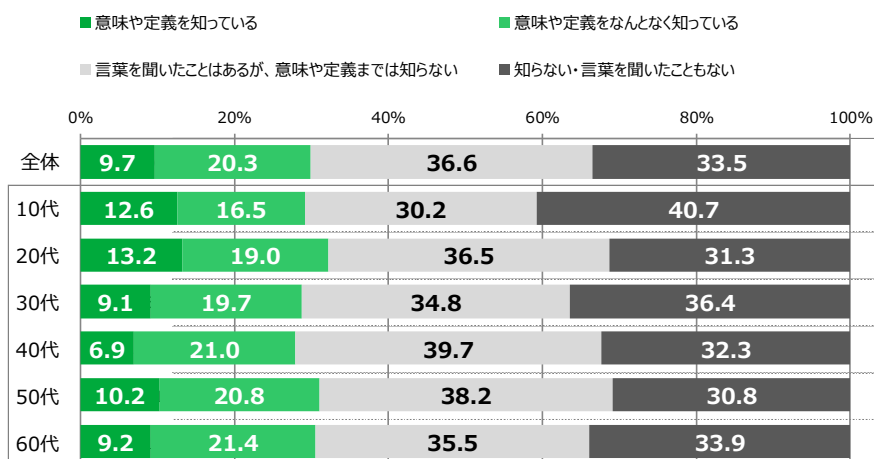
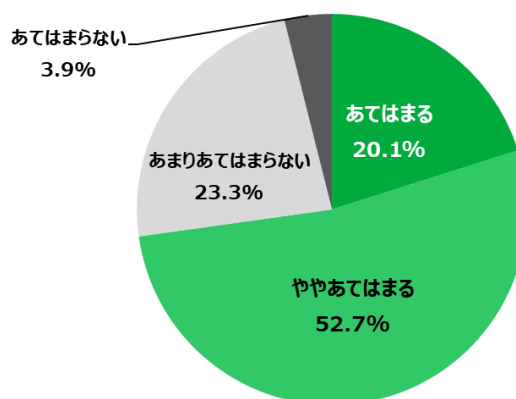
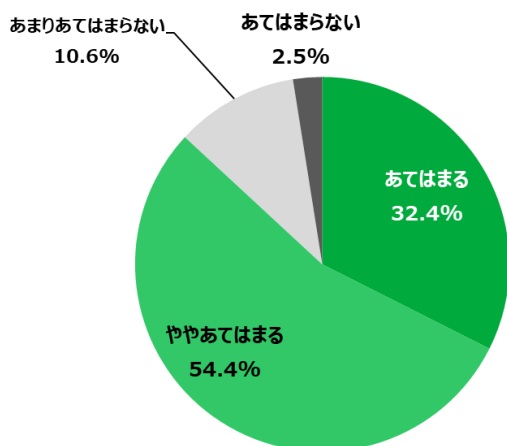


図2：「ダイバーシティ&インクルージョン」に対する意識

【多様性に富んだ社会を作ること重要だと思う】

【社会をあげてダイバーシティ&インクルージョンを推進するべきだ】



② 95.9%が社会的マイノリティに対して日本社会に差別や偏見があると感じており、73.4%が実際に何らかの「心の壁」を意識した経験がある

95.5%もの人が社会的マイノリティに対する差別や偏見が日本社会にあると感じており（図3）、実際に73.4%が日常生活の中で社会的マイノリティに何らかの「心の壁」を意識した経験があると回答しました（図4）。また具体的に「心の壁」を意識した経験のある対象として最も多かったのは、「精神障害、発達障害、知的障害のある人」で62.2%となり、次いで「身体障害のある人」で53.7%となりました（図5）。

「ダイバーシティ&インクルージョン」の意義を認識しつつも、社会的マイノリティに対して、日本社会が抱える差別や偏見は非常に多くの人を感じており、個人レベルでも「心の壁」を感じた経験が7割以上となり、「ダイバーシティ&インクルージョン」推進に向けた課題が見えてきました。

図3：日本社会における差別や偏見の有無

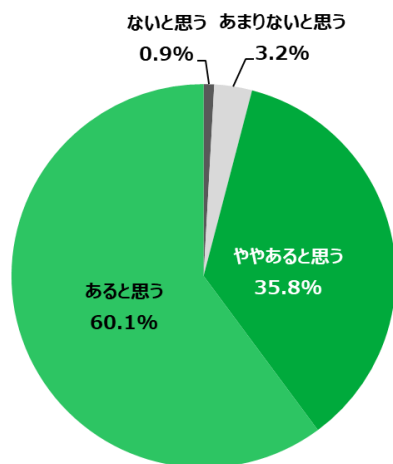


図4：自分自身が「心の壁」を意識した経験

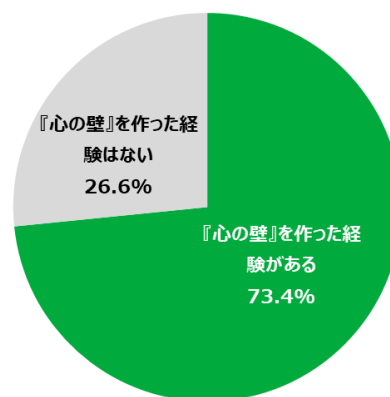
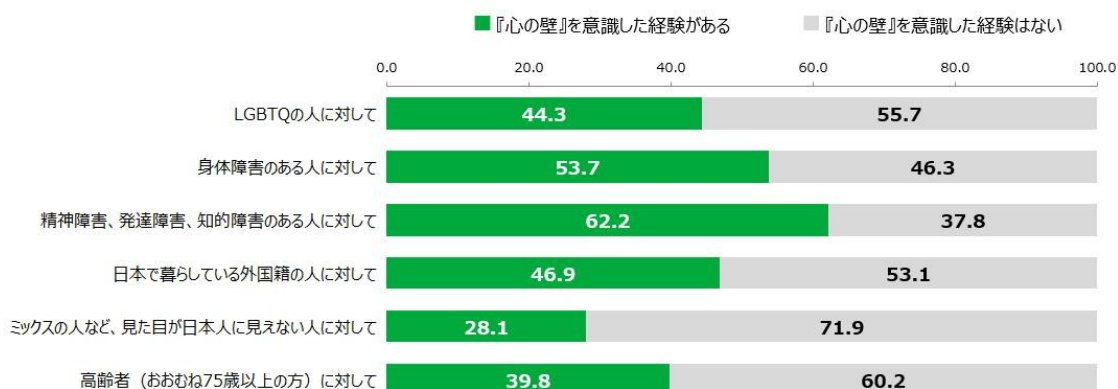


図5：「心の壁」を意識した対象



③ 社会的マイノリティに対する差別や偏見は10代が61.6%で最も低く、最も高い60代の72.9%と11.3ptの差。特にLGBTQに対する差別や偏見は、10代は26.7%であるのに対して60代は54.6%と27.9ptもの大差がある。

世代別に社会的マイノリティ全体に対する意識を調査すると、差別や偏見があると回答した10代は61.6%で最も低い割合となり、最も割合の高かった60代の72.9%と比較して11.3ポイントも差がありました(図6)。特にLGBTQに対しては、差別や偏見があると回答した10代はわずか26.7%であるのに対し、60代は54.6%と27.9ポイントもの大差があることがわかりました(図7)。

大差の背景についてはさらなる調査が必要ですが、10代の若い世代では、LGBTQをはじめとする社会的マイノリティに対する先入観が薄いことや、メディアやSNS等を通じて社会的マイノリティのことを知る機会が多いこと等が考えられます。

「ダイバーシティ&インクルージョン」を社会的に根付かせていくためには、こうした先入観にとらわれない若い世代の参画が不可欠であると言えます。

図6：世代別 社会的マイノリティ全体に対する差別や偏見の有無

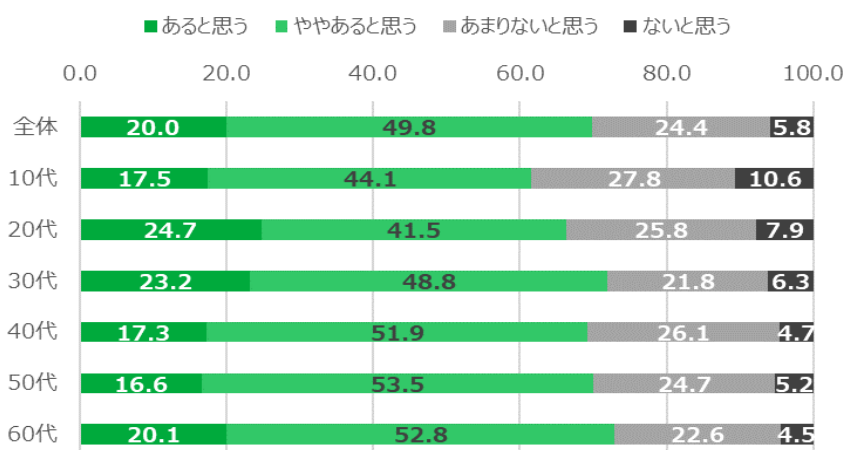
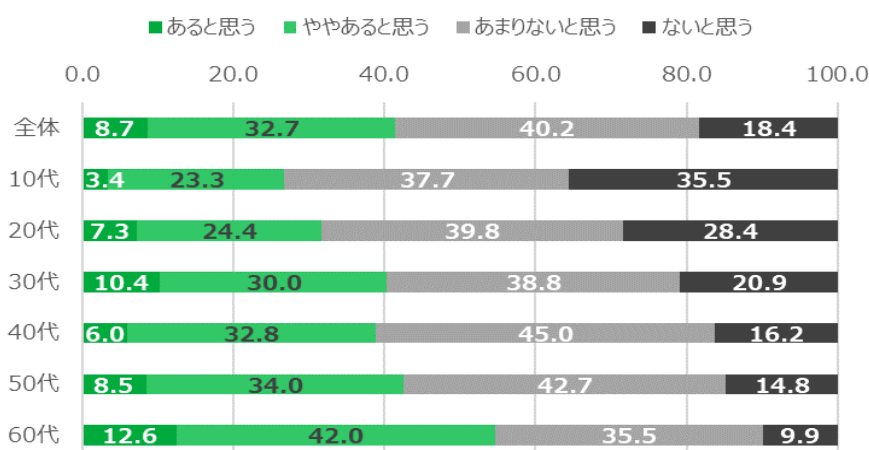


図7：世代別 LGBTQに対する差別や偏見の有無

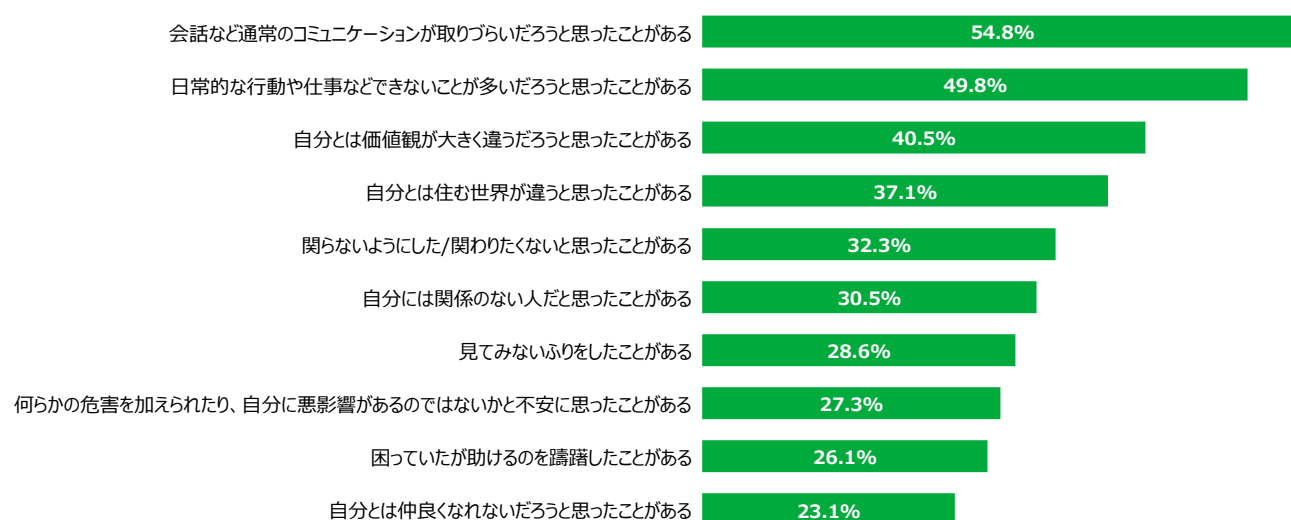


④ 社会的マイノリティに対する「心の壁」の感じ方は、「会話など通常のコミュニケーションが取りづらいたろうと思った」が54.8%で最も多く、次いで「日常的な行動や仕事などできないことが多いだろうと思った」49.8%、「自分とは価値観が大きく違うだろうと思った」40.5%

社会的マイノリティに対する具体的な「心の壁」の感じ方として最も多かったのは、「会話など通常のコミュニケーションが取りづらいたろうと思った」が半数以上の54.8%でした。次いで「日常的な行動や仕事などできないことが多いだろうと思った」が49.8%、「自分とは価値観が大きく違うだろうと思った」が40.5%という結果となりました(図8)。

社会的マイノリティに対して、コミュニケーションや日常生活の行動における物理的な「難しさ」や、外見および内面の「違い」を感じ、それが社会的マイノリティとの関係性を持つ・深めることへの躊躇につながっている可能性が明らかになりました。そのいずれも、深く接することなく見た目や思い込みで判断してしまっている可能性もあります。

図8：具体的に意識した経験のある「心の壁」

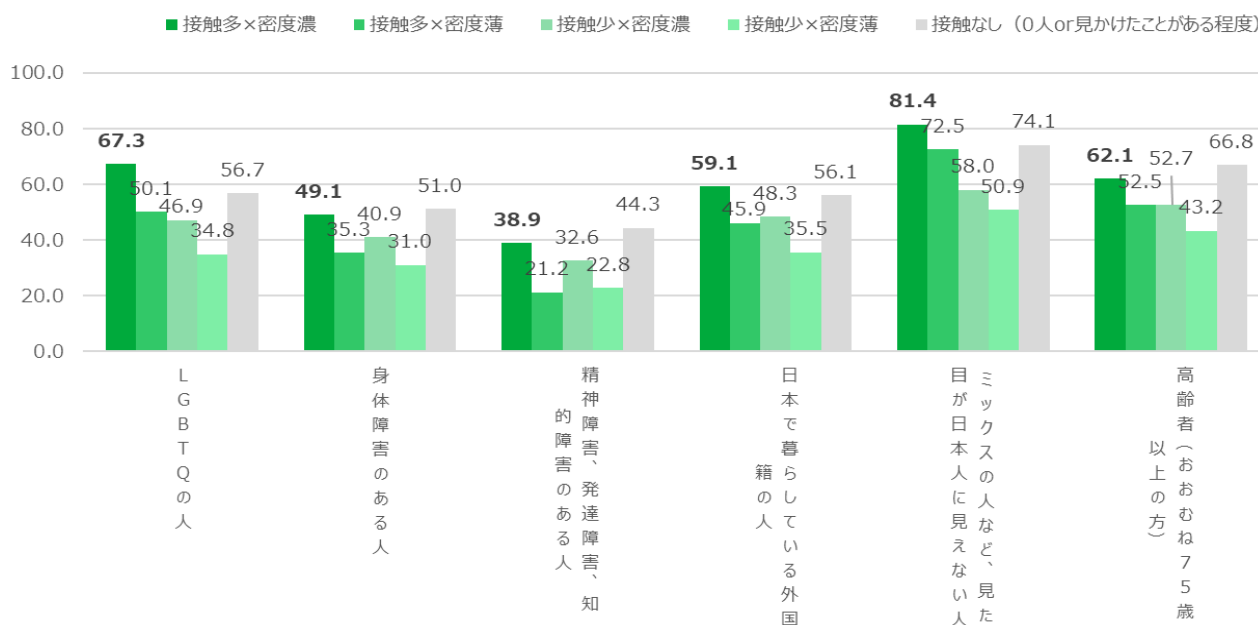


⑤ 社会的マイノリティとより多く、そして深く関わった経験のある人のほうが、そうした経験の少ない人比べて「心の壁」を感じづらい

それぞれの社会的マイノリティと関わったことのある人数とその期間、親密度（仲の良さ）を調査し、接触頻度と密度別に「接触多×密度濃」、「接触多×密度薄」、「接触少×密度濃」、「接触少×密度薄」、「0人or見かけたことがあるだけ」の5つのグループ分けを行い、グループごとに「心の壁」を「感じなかった」割合を調べました。その結果、いずれの対象に対しても「接触多×密度濃」グループでは「心の壁」を感じなかった割合が高く、「接触少×密度薄」では割合が低くなっていました。つまり、社会的マイノリティとより多く、そして深く関わった経験のある人ほど「心の壁」を感じていないということが分かりました（図9）。

一方、「0人or見かけたことがあるだけ」のグループについても、「心の壁」を感じた経験が少ないことが分かりました。これは、「心の壁」を意識した経験についての設問が、社会的なマイノリティに対して何らかの接点があったことを前提とする選択肢形式となっており、社会的マイノリティの存在をあまり意識していないことや無関心により、どの選択肢も選ぶことができなかった可能性が考えられます。例えば、このように社会的マイノリティの存在に気づいていない、関心が薄いという人が、初めて自分と違いがある社会的マイノリティと接したときには、大きな「心の壁」を作ってしまう可能性もあることから、普段の生活の中で社会的マイノリティの存在に気づき、少しでも多く接したり、コミュニケーションを通じて深く関わることが「心の壁」を減らし、受け入れることにつながると考えられます。

図9：接触頻度×密度別 各社会的マイノリティに対する「心の壁」を「意識しない」割合

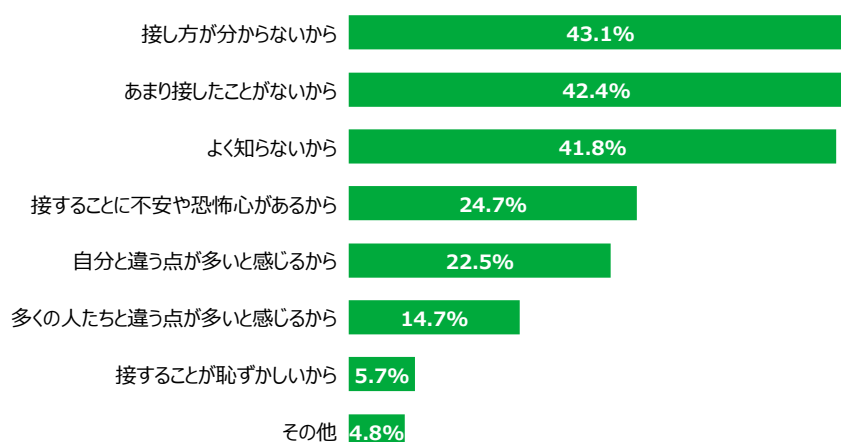


⑥ 社会的マイノリティに対する「心の壁」の原因、第1位は「接し方が分からないから」43.1%、第2位は「あまり接したことがないから」42.4%、第3位は「よく知らないから」41.8%

社会的マイノリティに対する「心の壁」の原因は、「接し方が分からないから」が43.1%で最も多く、次いで「あまり接したことがないから」が42.4%、「よく知らないから」が41.8%となりました(図10)。

「心の壁」は社会的マイノリティと「接したことがない」ために「知らない」ことが原因となっていることが明らかになりました。

図10：「心の壁」の原因

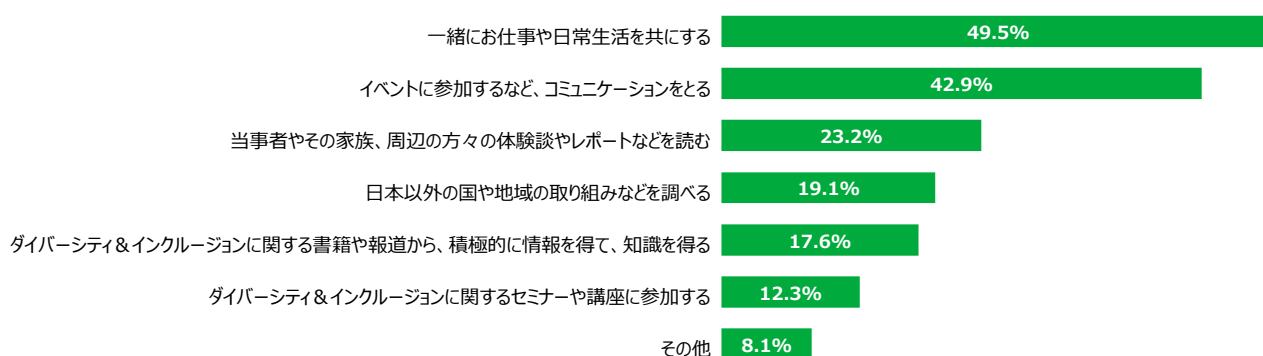


⑦ 「心の壁」を減らす方法の第1位は「一緒にお仕事や日常生活を共にする」が49.5%、第2位は「イベントに参加するなど、コミュニケーションをとる」が42.9%、第3位は「当事者やその家族、周辺の方々の体験談やレポートなどを読む」が23.2%

「心の壁」を減らすための具体的な方法として最も多かったのが「一緒にお仕事や日常生活を共にする」で49.5%と約半数の人が回答しました。次いで「イベントに参加するなど、コミュニケーションをとる」が42.9%、「当事者やその家族、周辺の方々の体験談やレポートなどを読む」が23.2%となりました(図11)。

日常生活を共にしたり、コミュニケーションを取るなど「接する」ことや、実際に当事者について「知る」ことが重要であると考えていることが分かりました。この2つが「心の壁」を減らす重要なカギであると言えます。またそのために、仕事やイベントなど何かを共有したり協力し合える「場」や、自ら知り学ぶことのできる「情報」も必要であると考えられます。

図11：「心の壁」を減らす方法



【まとめ】

「心の壁」を減らすたった2つの解決策は、「接する」、「知る」。

日本において「ダイバーシティ&インクルージョン」が浸透し、多様な個性を受け入れ尊重し合い、誰も孤立することなく助け合う社会を実現するためには、生活者ひとりひとりの社会的マイノリティに対する「心の壁」を減らすことが重要です。「心の壁」は、社会的マイノリティへの先入観によって自ら作り上げていることが多いと考えられます。そうした「心の壁」を減らすためには、「接する」と「知る」ことが第一歩となります。日常生活でそうした機会が少ない場合には、イベントなど、社会的マイノリティに出会うことができたり、何かをともに体験できる場に参加することも有意義であると言えます。

日本財団はTrue Colors Festivalの開催を通じ、多様な個性が出会い「接する」ことで力を合わせて様々な気づきや発見が生まれ、互いのことを「知る」ことのできる場を作り出したいと考えています。そして、「ダイバーシティ&インクルージョン」の実現に向け、新しい価値観が生まれる機会を創出していきます。

【日本財団とは】

日本財団は「ソーシャルイノベーション」のハブとなり、子ども支援、障害者支援、災害復興支援などを通じて、よりよい社会づくりを目指しています。障害者支援の分野では、日本に加え世界48カ国を対象に様々な活動に取り組んできました。国内では、累計40,000台の福祉車両の提供、日本財団パラリンピックサポートセンターの設立・運営、電話リレーサービスの制度化、障害者の就労支援などを行ってきました。海外では、3,000人以上の障害者に大学進学支援を行った他、アジア地域で約500人の義肢装具士を育成し、50万本を超える義手義足を肢体障害者に提供しています。

【True Colors Festival 公式サイト】

URL: <https://truecolors2020.jp/>

注意：本リリースのデータおよび図表について、報道関係者様以外の無断利用・掲載はお断り致します。

<リリースに関するお問い合わせ先>

True Colors PR 事務局（サニーサイドアップ内）

担当：高良、浅野

Tel: 03-6894-3201 / FAX : 03-5413-3051 / E-mail : tcf@ssu.co.jp

<事業及び調査に関するお問い合わせ>

日本財団 特定事業部 True Colors チーム 青木

Tel:03-6229-5137 FAX: 03-6229-5150 E-mail:t_aoki@ps.nippon-foundation.or.jp